



# 藤 水 和

私の望む甲南大学図書館の近未来像

「図書館」が無くなる!?

新 刊 紹 介

お 知 ら せ

## 私の望む甲南大学図書館の近未来像 - 甲南大学のハンディーを乗り越える中核施設として -

国際言語文化センター助教授 柳 原 初 樹

東灘区岡本は、「おしゃれな街」だそうだ。しかし、一部の受験生や学生の中に「おしゃれな街」岡本が借景的に大学のブランド力UPに関与しているとしても、それは脆弱な要素であろう。街なら、三宮や港神戸のほうがはるかに魅力的だし、町全体が借景といえる京都と比較した場合に、差は一目瞭然である。甲南のキャンパスはとにかく狭い。学生の憩えるスペースが少ない。甲南大学のハンディーはまさに、キャンパス空間の狭隘さである。さらには、夜になるとキャンパス周辺には、飲食店やコンビニも無く、イノシシ以外においしいものとは出会わないという閑散とした環境が、教員、学生を早く家路につかせ、大学の活力を生み出さない遠因となっている。ようするに、研究・教育・学生生活・クラブ活動が爆裂できる環境に無い。学生の話聞いても、そうしたコアー不在のキャンパス構造が学生生活にも何か物足りなさを与えているようである。

しかし、愚痴を百回述べても何も生まれぬ。このハンディーをどう乗り越えるかが大事である。大学を2次元空間的に横方向に拡張できないのなら、3次元的に活用するしかないであろう。図書館を中心に、古代バビロンのように空中庭園や地下回廊のようなものを張り巡らし、各号棟を連結することによって、空中に知的空間を生み出し、機能的な連結を強化する。大きな大学にはできない、小規模の大学だからこそできる組織の集約を図る。

図書館は、学生の知的作業をフルにサポートし、彼らが知的な談話と交わりを行う空間として今後、潜在的な可能性を秘めている。他大学との差別化を図り、グレードの高い知的な学生生活を過ごしてもらえるためにまずは、以下のような図書館に生まれ変わって欲しい。

1. 現状の建物の屋上を透明感あるガラス張りのペントハウスにし、階下にも自然光をふんだんに取り入れ、3、4階書庫を完全開架式にする。屋上は、学生の読書・自習室とする。屋上に夜9時まで営業のカフェテリアも設ける。
2. 図書館と9号館を空中回廊で結び、ゆったりとした回廊にも、PCやスキャナーなどを設置し、学生の授業準備、学習サポート体制を整える。ここで、作業した内容は大学のサーバ内の自分のファイルに保存でき、自宅からでも取り出せ



(自然光を取り入れた美術館)

るようにする。学生には最低5MB ぐらいの割り当てを行い、理工系の学生には1G ぐらいは割り当ててあげたい。

3. 図書館周辺に地下回廊を掘り、各所に天窗を設け、自然光を取り入れる。書庫のスペースがないなら、廃棄せずに、地下にでもスペースを作るべき。書籍を廃棄せず、人を誘う地下スペースの創出と有効活用を行う。

厦門大学図書館  
(開架式は世界の潮流)



梅田スカイビル空中庭園



4. 空中回廊の下は、雨が防げるので、ここにもベンチなどを置いて、学生の憩える空間を創出する。
5. できれば、9号館から、さらに体育館にも回廊をつなげる。体育館は、改修し、勉強に疲れた学生が、ジムやリラクゼーションを行えるようにする。
6. 国際言語文化センターと情報教育センターが中心となって、英語や中国語、フランス語、ドイツ語、韓国語などで、海外提携大学の学生とネットTVやメールで議論できるようなパートナーシップを構築し、技術的にサポートする体制を作る。図書館内にはそのための部屋を作る。Eラーニングや遠隔地教育の充実。
7. 英語の出来る司書を養成し、海外の大学や博物館、美術館との提携を深め、研究資料の取り寄せやレファランスの充実・支援体制を作る。

インターネットの普及により、情報は驚くべき速さで、世界中を流れ、獲得しやすくなった。しかし、間違った情報、精度の低い情報も押し寄せてくる。このような環境下、学生が学術書や専門書を読む意義はますます高まってきている。対象を精査し、批判検証し、かつ対峙的に著者の視点が明示的に述べられている学術書を複数読むことによって、問題を単次元で捉えるのではなく、問題の全体像や、複数の視点を学んで欲しいからである。

また、文学書を読み感動し、共感力を育むことも素晴らしい。昔読んだ一遍の詩、詩句、名文句や作品が、その人を絶望の淵から救うことだってある。文字が命となることは大いにある。また、芸術作品の鑑賞は世界を見る目を豊かにするであろう。ゲーテはニュートンの計量的光学に反対して「色彩論」を書いたが、ネオプラトン主義や神秘主義の影響を受けたゲーテが、「もし我々の眼が太陽のようでなければ、どうして光を感じることができよう」と語った逆説もまた真なりと思えるのが人生である。分析的な知と直感的な知の相互補完性が生を豊かにしてくれることを我々はゲーテとニュートンの対立から学ぶことができよう。

甲南大生の多くが将来、社会に出て多彩なクライアントと接し、その多様なニーズや予期しなかった問題に出会うことになるだろう。その時こそ、若い頃から読書や勉強、友人との対話で培われた知性と感性が問われるのである。最も大事なことは、「ナンデダロー？ナンデダロー？」と常に根本を問う習慣を身に付けておくことであるように思われる。

図書館はそのためにも、中心的な存在であり、将来の人材を育成する空間として大変身して欲しい。